

一般外国語における動機づけが初等英語科指導法への エンゲージメントを予測するプロセス —教員養成系大学の学生を対象として—

染谷 藤重

The Process by Which Students' Motivation in Liberal English Predicts Engagement in Elementary School English Education: A Case of University Students Undergoing Teacher Training

Fujishige SOMEYA

Accepted June 21, 2021

抄録：本研究の目的は、教員養成系大学における一般外国語の動機づけと教職科目である初等英語科指導法のエンゲージメントとの関連性を明らかにすることにある。特に、一般外国語のクラスにおける教師の動機づけスタイル（自律性支援）が授業の欲求充足を媒介とし、内発的動機づけを予測し、その動機づけが、初等英語科指導法の授業へのエンゲージメントにどのような影響を及ぼすかに関して明らかにする。参加者は、教員養成系大学2年生の男性37名、女性83名の120名である。SEM（Structural Equation Modeling）を行った結果、一般外国語クラスにおける自律性支援が、授業への欲求充足を媒介とし、内発的動機づけを予測することが明らかとなった。また、上記の動機づけのプロセスが初等英語科指導法へのエンゲージメントを強く予測することが明らかとなった。

索引語：動機づけ、自己決定理論、英語教育、教員養成

Abstract: The purpose of this study was to clarify the relationship between students' motivation in liberal English at teacher training universities and engagement in the method of teaching elementary English. In particular, the motivational style (autonomy support) of teachers in liberal English mediates the satisfaction of the needs of the class. It clarifies the effect on intrinsic motivation and how it is connected to engagement in the English teaching method course. The participants in this study were undergraduate 2nd-year students at the National University of Teacher Training (male: 37; female: 83). The SEM results revealed that the autonomy-supportive teaching of English teachers fulfills the need for relatedness in English classes and enhances the intrinsic motivation of English learning. In addition, it was clarified that improving the intrinsic motivation for English learning had a strong effect on engagement in elementary English teaching methods.

Key words: Motivation, Self-determination Theory, English Education, Teacher Training

1. はじめに

2020年度より、小学校において外国語（英語）が教科化され、小学校教員における小学校英語を教えるための力がますます必要となってきた。そのような中で、小学校の教員免許を取得するためには、初等英語の指導法の授業を必修として単位を取得しなければならない状況となっている。その中で、学生の小学校英語への興味関心を高め、指導法の授業に積極的に参加させ、今後の小学校英語の授業を担当する教員となるための資質・能力を育成する必要性がある。そのためには、学生の初等英語科指導法への高いエンゲージメントを維持し、小学校英語を学ぶ動機づけを高めることが求められると考えられる。教員養成系大学においては、英語の専攻であろうとなかろうと、教養英語は必修とされている。つまり、全学生が教養英語及び初等英語科指導法を受講することとなる。筆者は、教養英語における（内発的）動機づけが、初等英語科指導法のエンゲージメントにどのような影響を及ぼしているかに関して調査する必要があると感じた。理由としては、教養英語と英語を教えるということ（英語科指導法）は、密接に関連しているのではないかと考えられるからである。したがって、本研究では、教養英語における授業スタイル、授業内動機づけ、及び内発的動機づけと初等英語科指導法の授業内におけるエンゲージメントとの関連性を明らかにする。

2. 先行研究

(1) 動機づけ（自己決定理論）

「自己決定理論（Self-determination Theory: SDT）」とは、Deci and Ryan（1985）によって提唱された理論であり、国内外の教育心理学の分野で多くの研究が積み重ねられてきた最も有力な動機づけ理論の一つである（速水，2019）。自己決定理論とは、「成長と統合に向かう自己の傾向性および、より統合された自己の感覚を発達させていく傾向性を生得的に備えているという生命論的視座に立脚した動機づけの考え方」（鹿毛，2013，pp.182–183）であるとされる。この理論には、現在6つの下位理論が存在するとされ、その中で「土台」として位置づけられている考え方が、「基本的心理欲求理論（Basic Psychological Needs Theory: BPNT）」であると述べられている（Ryan & Deci, 2017）。基本的心理欲求理論とは、自律性（Autonomy）、有能性（Competence）、関係性（Relatedness）の欲求充足が、内発的動機づけの促進、人間の成長、統合的な発達、ウェル・ビーイング（Well-being）のために不可欠であるという考え方である。

(2) 動機づけスタイル

「動機づけスタイル（Motivating Style）」とは、動機づけに関する信念の在り方、他者との関わり方の方向性、対人関係の技のレパートリーを伴う教育の在り方とされ（鹿毛，2013）、「自律性支援（Autonomy Support）」と「統制（Controlling）」に対置することによって検討が進められている（Reeve, 2018）。自律性支援とは、(1) 学習者の意見を傾聴し、学習者が自分自身のやり方で振舞うことを許容すること、(2) 学習者の内面にある動機づけリソースを育むこと、

(3) 学習者の情動的な言葉を重視すること、(4) 学習者の価値を促すこと、(5) 学習者のネガティブ感情の表出を認め、受け入れることなどを指している (Reeve, 2018; 高井ほか, 2020)。

現在までの研究において、「自律性支援」は、自律性の欲求充足のみでなく、有能性、関係性の欲求充足にも正の影響を及ぼすという考え方が存在する (Skinner et al., 2009)。

(3) エンゲージメント

成果としての「エンゲージメント (Engagement)」とは、「心理的没入」と表現でき、興味や楽しさを感じながら気持ちを集中させ、注意を課題に向けて維持するような「熱中」する心理状態である。このエンゲージメントは、「行動的エンゲージメント」「感情的エンゲージメント」「認知的エンゲージメント」「状態的エンゲージメント」に分かれているとされる (外山, 2018)。Skinner et al. (2009) によれば、エンゲージメントとは、「質の高い学び」を実現する社会的、認知的、人格的な発達にポジティブな影響を及ぼす心理状態であると記述されている。

行動的エンゲージメントとは、授業を始め、学習場面や学習課題における関与、努力、持続性、忍耐を含む概念であるとされる (梅本ほか, 2016)。感情的エンゲージメントとは、興味、退屈、不安、楽しさ、といった学習者の感情的反応に関する概念であるとされる (梅本ほか, 2016)。認知的エンゲージメントとは、洗練された深い学習方略などの使用や、自己調整方略 (学習) の使用といった認知的な参加における概念であるとされている (Reeve, 2018)。最後に、エージェント的エンゲージメントというものがあり (Reeve, 2018)、学習者が受け取る指導の流れにおいて、学習者自身が建設的な貢献をすることと定義されており、外山 (2018) は、エージェント的という意味を専心ととらえ、状態的エンゲージメントと命名している。本研究では、上記の4つの構成要素をエンゲージメントとして定義する。

英語の授業を対象とした研究で、「動機づけスタイル」と「エンゲージメント」の関連性においては、Jang et al. (2016) が最新の知見を示している。Jang らは、自己決定理論における二重過程モデルを用いて、教師の自律性支援は、心理的欲求充足を媒介して、エンゲージメントを予測することを明らかにしている。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、教員養成系大学における学生の教養英語における動機づけと初等英語科指導法の授業のエンゲージメントとの関係性を明らかにすることにある。特に、教養英語における教員の動機づけスタイル (自律性支援) が、授業における欲求充足を媒介し、内発的動機づけに及ぼす影響、及びそれらが指導法における授業へのエンゲージメントにどのように結びついているかを明らかにする。

4. 本研究の方法

(1) 参加者と調査時期、倫理的配慮

本研究の参加者は、教員養成系の国立大学における学部2年生120名（男性：37名；女性：83名）を対象としている。この学生たちは、1年生の時に2単位（2つの教養英語の授業）を受講している。初等英語科指導法の授業は、2年生の前期に行われた。専攻は、国語・理科・体育・音楽・英語の領域に所属する学生たちであった。

調査は、2019年8月にアンケートを用いて行われた。

倫理的な配慮としては、調査実施前に「思った通りに回答してよいこと」「アンケートは無記名であり、個人が特定されないこと」「調査以外の目的で使用しないこと」「成績には一切関係ないこと」を書面、また、口頭で伝えた。本アンケート調査の倫理的配慮については、「千葉大学における研究者の行動規範」（千葉大学，2006）に基づき、調査協力者に対して実施した。内容は、下記の通りである。

1) 協力は自由意志に基づくこと

本アンケートへの協力は自由意志になるので、途中で回答をやめることができる。また、回答しない場合にも不利益は生じない。

2) 個人情報の保護に万全をつくること

回収したデータは、研究室内の鍵のかかる机等で厳重に管理する。また、研究が終了した時点でアンケート用紙はシュレッダーで破棄する。電子データはパスワードを設定したパソコン及びファイルに保存し、研究者以外のアクセスを制限する。学会や学術論文等での研究成果公表段階時においても個人情報として扱うことはしない。

(2) 調査の内容

調査はアンケートによって行われた。自律性支援の項目は、Reeve and Jang（2006）を参考にして、英語学習者用に改良したものを用いた。授業動機づけとしては、基本的心理欲求理論をもとにして作成された項目を用いた（染谷，2020a）。内発的動機づけに関する項目は、廣森（2006, 2010）を参考に作成された。最後に、エンゲージメントに関する質問項目は、外山（2018）を参考に作成された。付録1から4にアンケート項目の記述統計量を示す。

5. 分析結果と考察

(1) アンケートの尺度の信頼性分析

「自律性支援」「自律性の欲求充足」「有能性の欲求充足」「関係性の欲求充足」「内発的動機づけ」及び「エンゲージメント」の尺度の信頼性を調べるために記述統計量及びクロンバックの α 係数を算出した。

信頼性分析の結果、6つの尺度得点は、受け入れうる十分な数値を示した。そこで、今後の分析でも、これらの尺度を用いることとした。

表 1 各尺度の記述統計量と信頼性係数

尺度名	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>
自律性支援指導	3.238	0.664	0.849
自律性の欲求充足	2.761	0.791	0.758
有能性の欲求充足	2.633	0.827	0.806
関係性の欲求充足	3.069	0.747	0.743
内発的動機づけ	2.635	0.904	0.934
エンゲージメント(指導法の授業)	2.986	0.605	0.909

(2) 相関係数の算出

6つの尺度の関連性を検討するために、相関係数を算出した。その結果を表2に示す。

相関係数を算出した結果、自律性支援指導と関係性の欲求充足の間には、中程度の正の相関が見られた ($r = .494, p = .000$)。また内発的動機づけ及びエンゲージメントの間にも弱いながらも有意差が見られた ($r = .187, p = .041; r = .255, p = .000$)。また、3欲求の相関に関しては、3つの欲求充足の間で、中程度の有意な正の相関が見られた (自律性⇔有能性: $r = .648$, 自律性⇔関係性: $r = .622$, 有能性⇔関係性: $r = .587$, いずれも $p = .000$)。さらに、3欲求の充足と内発的動機づけの間には、すべてにおいて中程度の相関が見られた ($r = .567, .480, .560, p = .000$)。最後に、エンゲージメントに関しては、すべての尺度において有意な差があることが見て取れる ($r = .255, .455, .468, .510, .752, p = .000$)。

表 2 相関係数

	1	2	3	4	5	6
1. 自律性支援指導	—	.195	.160	.000	.041	.005
2. 自律性欲求充足	.119	—	.000	.000	.000	.000
3. 有能性欲求充足	.129	.648**	—	.000	.000	.000
4. 関係性欲求充足	.494**	.622**	.587**	—	.000	.000
5. 内発的動機づけ	.187*	.567**	.480**	.560**	—	.000
6. エンゲージメント	.255**	.455**	.468**	.510**	.752**	—

* $p < .05$, ** $p < .01$ 左下: 相関係数, 右上: 有意確率

(3) 共分散構造モデリング (SEM)

相関係数の結果をもとに、図1のようなパス図を作成し、IBM SPSS Amos Ver.26を用いて、SEMを行った。図1における実線は有意であると、破線は有意でないと仮定する。

SEMの結果、モデル適合度指標が、 $\chi^2 = 142.659, df = 4, \chi^2/df = 35.065, GFI = .713, CFI = .582, RMSEA [90\%CI] = .540 [.466, .617], AIC = 176.654$ という非常に当てはまりが悪い数値が得られた。そこで、仮説での段階で有意に影響すると仮定していたパスで有意でないものをWald法を用いて削除し、モデルの再検討を行った。その結果得られた最終的なモデル図(パス図)が図2である。

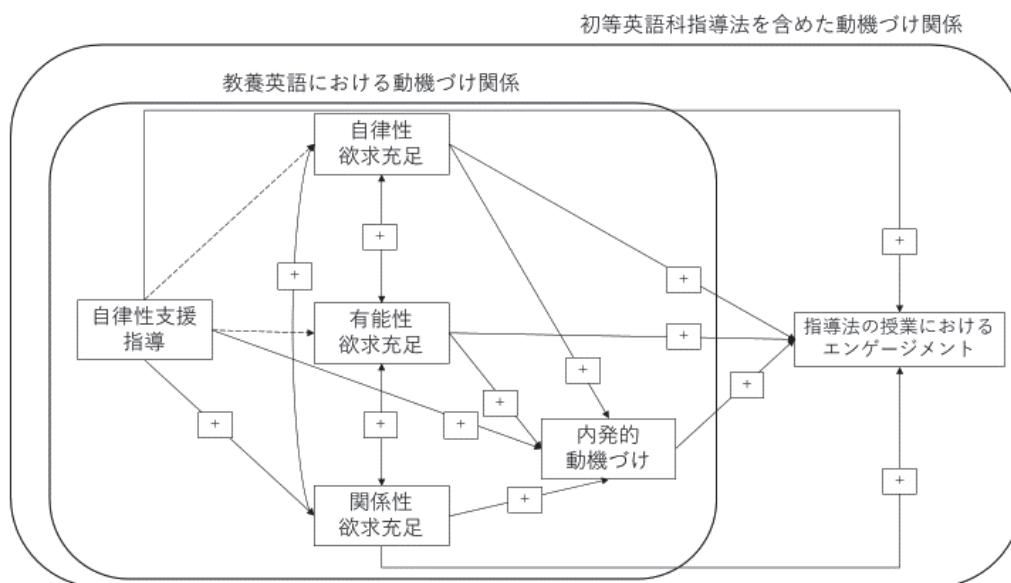


図1 教養英語と指導法の授業における動機づけとエンゲージメントとの関連図

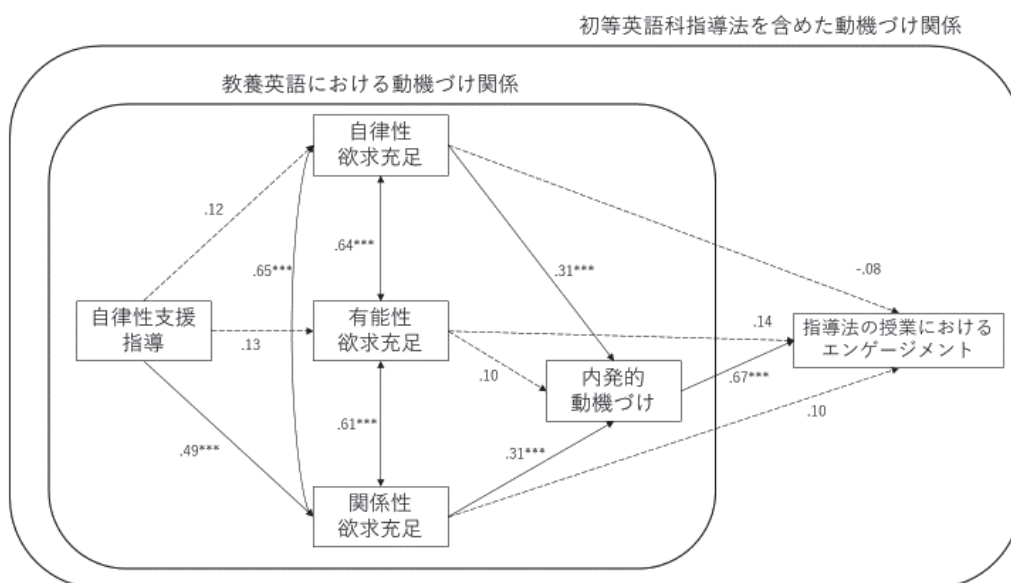


図2 教養英語と指導法の授業における動機づけとエンゲージメントとの関連性のパス図

図2における実線は、有意差が見られたパスを表し、破線は、有意ではないが、Wald法を行う過程で残す方がモデル適合度がよいとされるパスである。このモデルの適合度指標は、 $\chi^2 = 2.161$, $df = 2$, $\chi^2/df = 1.081$, $GFI = .994$, $CFI = .1.000$, $RMSEA [90\%CI] = .026 [.000, .186]$, $AIC = 40.161$ という結果が得られた。GFI, CFI とともに .950 を超えており、RMSEA の値も .05 を下回っていることから、このモデルは非常に当てはまりがよいものと解釈できる。

このモデルから英語学習における内発的動機づけは、指導法の授業におけるエンゲージメントに強い影響を及ぼしていることが明らかとなった ($\beta = .67$, $p = .000$)。この結果から、教養英語の時間に英語学習における内発的動機づけを高めることによって、その後の小学校教員養成課程における初等英語科指導法における学習の質が変化すると言い換えることができる。

う。自己決定理論の枠組みから学生の教養英語の動機づけを考えると、自律性支援的指導が、重要な働きをしているととらえることができる。教員養成系大学の学生の教養英語の動機づけに関しては、教員の自律性支援指導が、関係性の欲求充足を媒介として、内発的動機づけを予測していることに注目することができる。理論的には、自律性支援指導は、3 欲求すべてを促進するとされているが (Reeve, 2018)、本研究では、自律性支援指導は、自律性及び有能性の欲求充足とは関係性がなかった。この理由としては、教員養成系大学の学生においては、人と人との関係性や教材教具・シラバスなどとの関係性の充足が高ければ高いほど、英語学習の内発的動機づけを高めると考えられる。自律性の欲求充足に関しては、単独で内発的動機づけを促進する要素となっていた。相関係数を見てみると、有能性の欲求充足も内発的動機づけと正の相関を示してはいたが ($r = .480, p = .000$)、自律性と関係性の欲求充足の影響で、パスが有意にならなかったと考えられる。同様に 3 欲求の充足とエンゲージメントには、すべてに正の相関が見られたが (表 2 参照)、内発的動機づけの影響が大きすぎた関係上、有意に予測することはなかったと考えられる。

6. 結論と教育的示唆

結論として、この研究では、教養英語の授業及び学習動機づけと初等英語科指導法の授業へのエンゲージメントとの関係性を論じてきた。分析の結果から明らかとなったことは、英語教員の自律的支援指導は英語の授業内における関係性の欲求を充足させ、それが英語学習の内発的動機づけを高めるということであった。それに加え、英語学習への内発的動機づけの向上は、初等英語科指導法の授業へのエンゲージメントへ強く影響を及ぼすことが明らかとなった。したがって、我々、教員養成系大学の教員は、教養英語の授業において、自律性支援を根底に置いた指導により学習者の欲求を高め、学習者の英語学習に対する内発的動機づけを高めることで、指導法の段階におけるエンゲージメントの質を高めると考えられる。少なくとも教員養成系大学における教養英語を教えている教員は、自律性支援の観点をしっかりと理解し、学生の欲求を見極め、内発的動機づけを高めていく必要がある。

具体的には、染谷 (2020b) で論じられているように、学生に強制的に授業内容を押し付けるのではなく、学生自身が、授業のタスク (課題) の中で、自分で役割を選択できるような工夫や、教室英語を適切に用いて、励まし、できると言うことを伝えていくことなどが挙げられる。また、学生一人一人のタスク (課題) 中の様子を観察し、戸惑っていたり、困惑している学生に対しては授業担当者が声がけをしたり、しっかりと課題をこなせるような時間を割くなどその生徒をきちんと理解し、その状況に合った行動などを心がけて授業に取り組むことが必要である。

近年、小学校の英語の教科化により、初等英語の指導法が必修となった。学習者の英語学習動機づけと指導法の授業をリンクさせて考えることが、今後の小学校英語教員養成において有益なものとなると考えられる。

参考文献

- 千葉大学 (2006). 「千葉大学における研究者の行動規範」 <http://www.chibau.ac.jp/general/approach/project/files/leaflet.pdf> (2021 年 8 月 1 日検索)
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination theory*. New York, NY: Plenum Press.
- 速水敏彦 (2019). 『内発的動機づけと自律的動機づけ 教育心理学の神話を問い直す』東京: 金子書房.
- 廣森友人 (2006). 『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』東京: 多賀出版.
- 廣森友人 (2010). 「第 3 章 動機づけ研究の観点から見た効果的な英語指導法」小嶋英夫・尾関直子・廣森友人 (編) 『成長する英語学習者 学習者要因と自律学習 (pp. 47-74)』東京: 大修館書店.
- Jang, H., Kim, E. J., & Reeve, J. (2016). Why students become more engaged or more disengaged during the semester: A self-determination theory dual-process model. *Learning and Instruction*, 43, 27-38.
- 鹿毛雅治 (2013). 『学習意欲の理論 動機づけの教育心理学』東京: 金子書房.
- Reeve, J. (2018). *Understanding motivation and emotion* (7th edition). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, Inc.
- Reeve, J. & Jang, H. (2006). What teachers say and do to support students autonomy-supportive and controlling styles of teaching: Opposite or distinct teaching styles? *Swiss Journal of Psychology*, 74 (3), 141-158.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. New York, NY: Guilford Press.
- Skinner, E. A., Kindermann, T. A., & Furrer, C. J. (2009). A motivational perspective on engagement and disaffection: Conceptualization and assessment of children's behavioral and emotional participation in academic activities in the classroom. *Educational and Psychological Measurement*, 69, 493-525.
- 染谷藤重 (2020a). 「高校生の英語における基本的欲求充足尺度の作成の予備調査—内発的動機づけに及ぼす影響—」『上越教育大学教職大学院研究紀要』第 7 巻, 217-223.
- 染谷藤重 (2020b). 「高校生の基本的心理欲求が内発的動機づけを予測するプロセー階層的重回帰分析を用いて—」*JAFLE BULLETIN*, 第 23 号, 132-146.
- 高井季代子・井口元貴・金澤直哉・大嶋雅・染谷藤重 (2020). 「教育心理学的観点から見た今後の小学校外国語指導の方向性—Reeve (2016) による自律性支援からの示唆」『上越教育大学研究紀要』40 (1), 253-261.
- 外山美樹 (2018). 「課題遂行におけるエンゲージメントがパフォーマンスに及ぼす影響: エンゲージメント尺度を作成して」『筑波大学心理学研究』, 56, 13-20.
- 梅本貴豊・伊藤崇達・田中健史朗 (2016). 「調整方略, 感情的及び行動的エンゲージメント, 学業成果の関連」『心理学研究』, 87, 334-342.

付録1 アンケート項目の記述統計量（自律性支援指導）

アンケート項目	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度
英語の教員は、（以下共通）				
・一人一人の発言や意見を注意深く聞いてくれる。	3.23	0.91	-0.75	-0.45
・個人個人で課題をする時間を取ってくれる。	3.36	0.89	-0.70	-0.55
・自分が十分に話す時間を取ってくれる。	3.16	0.98	-0.71	-0.37
・自分のできたことを見逃さずに褒めてくれる。	2.89	0.98	-0.22	-0.74
・自分の努力を認めてくれる。	3.17	0.92	-0.34	-0.56
・自分が問題でつまづいた時、解決を促すようなヒントを与えてくれる。	3.45	0.88	-0.72	-0.13
・自分のコメントや質問に丁寧に対応してくれる。	3.41	0.86	-0.65	0.27

付録2 アンケート項目の記述統計量（基本的心理欲求充足）

アンケート項目	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度
自律性の欲求充足				
・英語の授業では、ストレスなく、リラックスして授業を受けることができると思う。	2.82	0.98	0.1	-0.58
・英語の授業では、不安がなく自分らしくいられると思う。	2.38	1.00	0.61	-0.15
・英語の授業では、自分が興味関心を持っていることができると思う。	3.08	0.91	-0.03	-0.93
有能性の欲求充足				
・英語の授業では、一人で取り組む授業中の難しい課題や協働的な（協力する）作業をうまく仕上げられる気がする。	2.83	0.98	0.36	-0.31
・英語の授業では、難しい挑戦でも好んですると思う。	2.67	1.00	0.35	-0.75
・英語の授業では、難しいこともうまくやることができると思う。	2.41	0.94	0.52	-0.14
関係性の欲求充足				
・英語の授業では、クラスの人と安心して授業に取り組めると感じる。	3.02	0.97	-0.03	-0.52
・英語の授業のカリキュラムは、自分にとって適切だと感じる。	3.16	0.91	-0.12	-0.15
・英語の授業で使われている教材・教具は自分にとって取り組みやすいと感じる。	3.03	0.88	-0.29	-0.07

付録3 アンケート項目の記述統計量（内発的動機づけ）

アンケート項目	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度
英語を学習することは、（以下共通）				
楽しいと思う。	2.60	1.02	0.15	-0.81
好きである。	2.72	1.01	0.18	-0.54
わくわくする。	2.42	0.96	0.23	-0.61
おもしろいと思う。	2.97	1.02	0.04	-0.90
興味深かいと思う。	2.26	1.10	-0.02	-0.53

付録4 アンケート項目の記述統計量（エンゲージメント）

アンケート項目	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度
初等英語科指導法の授業内の課題は、（以下共通）				
感情的エンゲージメント				
楽しかった。	2.58	1.01	0.14	-0.73
好きだった。	2.53	1.00	0.21	-0.66
やっているとき、わくわくした	2.42	0.97	0.27	-0.63
おもしろかった。	2.68	1.03	0.03	-0.89
興味深かった。	2.98	1.07	-0.01	-0.94
行動的エンゲージメント				
最後まであきらめずに取り組んだ。	3.61	0.81	-0.79	0.90
一生懸命に取り組んだ。	3.75	0.80	-1.21	1.93
精力的に取り組んだ。	3.45	0.80	-0.69	0.44
熱心に取り組んだ。	3.34	0.80	-0.50	0.58
集中して取り組んだ。	3.54	0.87	-0.99	1.04
状態的エンゲージメント				
取り組んでいる時は、課題のことしか考えられなかった。	2.91	1.06	-0.16	-0.90
取り組んでいる時、課題に没頭してしまった。	2.96	1.02	-0.16	-0.80
あっという間に終わってしまった。	2.10	0.97	1.08	1.18
課題に取り組んでいる時、夢中になっていた。	2.65	0.98	0.48	-0.19
認知的エンゲージメント				
解き方を工夫していた。	2.90	0.97	-0.14	-0.60
効率的な解き方はないか考えながらやっていた。	3.08	1.01	-0.30	-1.04
どうすれば上手く解けるのか考えながらやっていた。	3.37	0.88	-0.59	-0.37